

時間表現における「先」について

檜和 千春

「先」は空間表現では前方を意味する。しかし時間表現で用いられると「結婚は先の話だ」「先の大戦」というように、未来と過去の両方を指すことができる¹。これはなぜだろうか。この問題は渡辺 (1995) で「先」だけではなく、「まえ」「うしろ」「あと」など空間表現から時間表現に転用されている他の語と共に包括的に取り扱われている。同論文は、原因は時間把握の違いにあるとし、三つの異なる時間把握の型を提示している。渡辺は意味論の立場から論じているが、メタファーやイメージスキーマといった認知言語学の知見を取り入れて論じると、人間の概念認識が語の用法に深く関わっていることがより一層明らかになると思われる。以下は、渡辺 (1995) を読んで問題を設定し、これから研究を進めるにあたっての覚え書きである。

1. 時間表現における「先」の不思議

「先」は空間表現では典型的に次のように用いられる。

- (1) 郵便局は銀行の先にあります
- (2) 500 メートル先、工事中
- (3) この道は先で左にカーブしている

いずれも、発話者または基準となる物の位置から見て前方を意味している。空間表現で「先」が後方を意味することはない。次に「先」の時間表現の例を示す。

- (4) 先が短い
- (5) 結婚は先の話だ
- (6) 先で苦労するよ
- (7) 500 年先の世界

¹アクセントの違いは考慮しない。

上の例は、いずれも発話時から見て未来を指している。一方、下の例では「先」は発話時から見て過去を指している。

(8) 先の大戦

(9) 先にお伝えしたように、遠足は中止になりました

(10) 先ほど、田中さんから電話がありました

言語表現には人間の時間の認識が反映されている。どのように時間を認識するかは文化によって異なるが、日本語の表現を観察すると英語と同様に時間が方向性を持った一次元の線として認識されていることがわかる。日本語では時間概念は「長い」「短い」「遠い」「近い」など、一次元の長さや距離に関わる形容詞で修飾される。たとえば「時間が長く／短く感じられた」「遠い／近い未来」というように²。時間概念が「広い」「高い」といった二次元、三次元の空間に用いられる形容詞で修飾されることはない。また、出来事の起きた順序は時間軸上における「前後」関係としてとらえられる。このことは線として認識された時間がある方向性を持っていることを示している。空間において基本的には進行方向に「前」という方向づけがなされる(山梨 1995: 194)。過去、現在、未来が方向性を持った直線上に並んでいと認識されるなら、空間表現では前方だけを意味する「先」が、時間表現では未来と過去という二つの方向を指すことができるのはなぜだろうか。

2. 先行研究について

言語と時間認識の問題は、多くの研究者によって従来、主に時制やアスペクトとの関連で論じられてきた³。Koschmieder は、アスペクトを人間の時間認識という心理的側面から説明しようとして、時間を線としてとらえ、時間線上に状況と話者(Ich)が位置を占めるという時間把握を提示した。そして、時間線が静止していて、話者が時間線上を過去から未来に向かって動くと感じられる場合と、話者が静止していて、状況を貼り付けた時間線が未来から話者を通り過ぎて過去に向かって流れていくと感じられる場合の二つがあると述べた。Koschmieder の時間把握が話者の

² 英語でもやはり一次元の長さや距離を修飾する形容詞が用いられる。例としては *Time was short, The day has been long, The end of the world is near, Monday seems so far away* など。Clark (1973: 49)

³ 山田 (1984) の 1 章、2 章で詳しく論じられている。

視点を常に時間線上に置くのに対し、次に述べる渡辺の時間把握は視点を時間の流れの外に置くことができるという点で異なっている。

渡辺 (1995) は時間表現の「先」が過去も未来も指すことができるのはなぜかという問題について、空間表現の「先」が前方と後方の両方を指すなら、「先」の意義に原因があるとすべきだが、そのような事実がないので時間認識に原因があると述べている。そして、「さき」「あと」「まえ」「うしろ」などの用例を考察し、話者と時間の流れの関わり方が異なる甲、乙、丙の三つの時間把握を提示している (渡辺 : 19-25)。

(甲) 時間は未来から過去への流れとして把握される。「先」は時の流れが過去へと向かう方向を指す⁴。話者の視点が時間の流れの外側にある「ひとごと」的時間把握であり、過去でも未来でも出来事の起きる順序を任意の基準を設定して相対的な「前後」関係で表わせる。(以下、主に「先」の用例を引用する。)

(11) 応仁の乱のさきに起こった出来事 (渡辺 : 21)

「さき」=過去の出来事、基準時より以前

(12) 2001 年になるさきに… (渡辺 : 21)

「さき」=未来の出来事、基準時より以前

(乙) 話者が時の流れと共に移動し、時の流れは話者が出来事を経験して行く過程として過去から未来へ流れると把握される。「先」は話者の進行方向即ち未来へ向かう方向を指す⁵。下の例が示すように、時間の流れの中で自由に視点を設定できるという点では甲のように「ひとごと」的だが、話者が過去から未来への進行方向にばかり目を向けがちであるため、進行方向と逆、つまり、過去へ向かう方向を「先」と対称的に「あと」で指すことができない。この点で次に述べる丙のように「わがこと」的である。

(13) さきのことなど誰にもわからない (渡辺 : 22)

「さき」=未来

⁴過去へ向かう方向を指すのであって、現在に対する過去という意味ではない。たとえば、(12) の「さき」は過去を指すのではない。

⁵未来へ向かう方向を指すのであって、現在に対する未来という意味ではない。たとえば、(14) の「さき」は未来を指すのではない。

- (14) 応仁の乱のさきに戦国時代が待っていることを予言した者はいなかった (渡辺：22-23)

「さき」＝過去の出来事、基準時より以後

- (15) 2001 年よりさきには、第三次世界大戦の可能性もある (渡辺：23)

「さき」＝未来の出来事、基準時より以後

- (16) *戦国時代のあとに応仁の乱があったのだ (渡辺：23)

「あと」＝過去の出来事。基準時より以前という読みができない

- (17) *第三次世界大戦になったりするよりあとに、2001 年を平和に迎えることができるだろう (渡辺：23)

「あと」＝未来の出来事。基準時より以前という読みができない

(丙) 話者は「わたしのいま」に固定される。「わがこと」的時間把握。時間が「いま」に向かって近づき (未来)、「いま」から遠ざかって行く (過去)。時間が流れると認識される方向は甲と同じだが、甲の「先」が相対的に「以前」のことであれば、過去の時点でも未来の時点でも指すことができるのに対し、丙の「先」は過去の時点だけを指す。

- (18) さきの世界大戦 (渡辺：24)

甲と乙の時間把握を比べると、「先」の指す方向が逆になっていることに気づく。甲では「先」が時間軸上で相対的に早く起きたこと (発話時を基準とすれば過去のこと) を指すのに対し、乙では時間軸上で相対的に遅く起きたこと (発話時を基準とすれば未来のこと) を示す。「先」が時間軸上で指す方向が全く反対になっている。「先」が過去も未来も指すことができるのは、このような時間把握の違いに原因があると渡辺は述べる。

3. これからの研究課題と方法論

上述の時間把握は話者が動くとするにせよ、時間が動くとするにせよ、空間移動のメタファーであると考えられる。メタファーは単にレトリックの問題ではない。人

間の概念体系の大部分はメタファーから成り立っている (Lakoff & Johnson 1980 : 3-4)。これは昨今、言語に対する新しいアプローチとして注目を集めている認知言語学の基礎となった考え方である。「先」や「前」は何の違和感もなく自然に日本語の時間表現で用いられている。しかし、これらは人間が時間という抽象的な概念を理解するために、より具体的で日常の経験を基盤として理解できる空間の概念領域を時間の概念領域に写像して使っている語なのである (後で述べるように厳密には「先」はものから空間へ、さらに時間へと二段階の写像のプロセスを経ていると考えられるが)。時間把握の問題は、空間の概念領域から時間の概念領域への写像として認知言語学のメタファー論の観点から取り扱うことで、説明力を増した議論が展開できるのではないだろうか。

また時間把握以外に、「先」という語がどのように理解されているのかという要因も考慮する必要がある。(11) (12) は (19) (20) のように、「先」を「前」と置き換えた表現の方がより自然である。

(19) 応仁の乱の前に起こった出来事

(20) 2001 年になる前に...

一方、(13) (14) (15) は「先」を「前」と置き換えることができない。

(21) *前のことなど誰にもわからない

(22) *応仁の乱の前に戦国時代が待っていることを予言した者はいなかった

(23) *2001 年より前には、第三次世界大戦の可能性もある (「前」 ≠ 以後)

乙の時間把握で「前」が使われない理由として、渡辺は「先」が持っている移動性が「前」にはないことをあげている。「郵便局の先」という場合には話者または視線が郵便局のある場所を通過しなければならないが、「郵便局の前」という場合にはそれがなくて静止的である。乙は話者が過去から未来へ移動するという時間把握であるから、移動性がなく静止的な「前」を使うことができないと述べている (渡辺 : 24-25)。このことはさらに掘り下げて考えてみる必要がある。

甲も移動性に関わる時間把握であるにもかかわらず（この場合、動くのは時間だが）、「先」が移動性を欠く「前」と交換可能であることはなぜか。むしろ「前」と交換した方が自然な表現となるのはなぜか。甲と乙では「先」の持つ移動性に何らかの変化があるのではないか。

乙で興味深いことは、話者が自らの進行方向に目を向けていて、逆の方向を忘れがちになるという指摘である。このことは話者の視線の向きを考慮する必要性を感じさせる。たとえば、乙の時間把握で話者は過去から未来の方向へ移動しながら、視線だけを過去の方角に向けることは可能だろうか。その場合、視線の向く方向の終端が「先」になる（即ち、「先」は時間軸上で相対的に早い時点を指す）のだから、(16)の「基準時より以前」という意味を正しく伝達する形は(24)となるだろう。

(24) 戦国時代のさきに応仁の乱があったのだ

これは多少不自然ではあるが、渡辺が甲であげた例とほとんど同じになる。

(25) 応仁の乱のさきに起こった出来事 [= (11)]

渡辺の時間把握は「ひとごと」「わがこと」という呼び方をしていることからわかるように、「主観性」という観点からの分類だった。しかし、上の事実は甲が必ずしも話者が時間の流れの外側にいる客観的な時間把握であるとは言えないことを示している。このことは甲と乙の時間把握が独立してあるのではなく、統合され得るかもしれないという可能性を示している。

そもそも、なぜ「先」に移動性が備わっているのだろうか。「先」は空間表現で同じように前方を意味する「前」とは異なり、本来は空間を指示する語ではない。このことは「先」の移動性に何か関係があるのだろうか。「先」は本来「ペンの先」「棒の先」というように長く細いものの先端を意味する。この意味の「先」は英語ではどのように訳されているだろう。ペンなどの尖った先端は‘point’、突き出たものの端は‘tip’、棒などの端は‘end’と訳し分けられている。‘point’や‘tip’が先端だけに注目している表現であるのに対し‘end’は長く細いものを線として認識し、先端を線の終端としてとらえた表現である。「先」はそれ自体の形状が長く細いわけではないが、語の使用に際しては長く細いもののイメージを欠くことができない。なぜなら、「先」は長く細いものの一部であり、現実の世界では「先」は単独で存在でき

ないからである。上にあげた英単語のすべてに日本語では「先」一語が対応するが、「先」の意味は‘end’に近いと考えられる。「先」の持つイメージは「犬」や「猫」ほど具体的ではない。何の「先」なのかということが明示されない場合のイメージまたはどのような「先」にも共通するイメージは、一本の直線とその終端であろう。このことは「先」の理解に認知言語学というイメージスキーマに関わるだろうことを示唆する。イメージスキーマとは人間が外部世界を理解するために具体的な経験を基盤として形成する認知図式である。たとえば、日本語で助数詞「本」が用いられる対象は古典的なカテゴリーの分類基準では共通の属性を持たないが、長く細いもののイメージスキーマが関わっていると考えれば、助数詞「本」が用いられる対象が予測できる。「鉛筆」も「道」も同様に「一本」という助数詞と共起するが、二つの名詞は同じカテゴリーには属さない。しかし、鉛筆は長く細いものの典型であり、一方、道も一次元の長く細い地形の一部として認識される（Lakoff 1987: 104-110, 山梨 1995: 110-113）。長く細いもののイメージスキーマが長く細い地形のイメージスキーマへと拡張されて、道という空間が理解されている。これはさらに軌道のイメージスキーマに変換されて物理的または抽象的移動の軌跡を持つような対象の理解にも関わっていく。たとえば、「電話を一本かける」という場合は、電話をかける側から受ける側に回線が繋がっている様子やメッセージが移動していく様子が、長く細い線や移動の軌跡として軌道のイメージスキーマと関わるために、「一本」という助数詞が使われる（山梨 1995: 112-113）。「郵便局の前」と「郵便局の先」の例にもどって考えてみよう。「前」は郵便局を参照点として、その前方の位置を意味する。「先」も前方を意味するが、単に位置を示すだけではなく郵便局を起点とするまたは通過点とする経路をたどって移動することを示している。「前」と「先」は前方を意味するという点では類義だが、二つの語には人間の空間認知の微妙な差が反映されている。この違いは「先」が関わる長く細いもの及び軌道のイメージスキーマを用いれば理解できる。軌道のイメージスキーマでは移動体が連続した空間を通過して動いて行くのである。

以上述べてきたように、時間表現において「先」が過去も未来も指すという問題は、認知言語学の知見であるメタファーやイメージスキーマを取り入れて説明できる見込みがある。時間認識は線上の空間移動のメタファーであるから、軌道のイメージスキーマと関わりと考えられる。とすれば、時間表現における「先」の用法は、

「先」をささえているイメージスキーマの方向性と時間認識をささえているイメージスキーマの方向性の重ねあわせ方によって決まる可能性がある。

参考文献

- Clark, Herbert H. 1973. "Space, Time, Semantics and the Child." in Timothy E. Moore (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language*. New York: Academic Press, 27-63.
- 河上誓作 (編著) 1996. 『認知言語学の基礎』研究社出版.
- Koschmieder, Erwin 1935. "Zu den Grundfragen der Aspekttheorie." in Ferdinand Sommer & Albert Debrunner (eds.) *Indogermanische Forschungen* 53: Verlag von Walter De Gruyter & Co.
- Lakoff, George 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作 他 (訳) 『認知意味論』紀伊国屋書店、1993)
- Lakoff, George 1993. "Contemporary theory of metaphor." in Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and thought*. : 2nd edn. Cambridge: Cambridge University Press, 202-251
- Lakoff, George & Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡辺昇一 他 (訳) 『レトリックと人生』大修館書店、1986)
- 山田小枝 1984. 『アスペクト論』三修社.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』ひつじ書房.
- 渡辺 実 1995. 「所と時の指定に関わる語の幾つか —意味論的に—」、『国語学』181, 18-29

Summary

On *saki* in Japanese Temporal Expressions

Chiharu NARAWA

The Japanese word *saki* means the end of something long, and it is also used in spatial and temporal expressions. While *saki* always indicates forward in spatial expressions, it indicates both forward and backward in temporal expressions. Why is there the incongruity? The answer may be closely connected with how human beings recognize time. This article suggests that image-schema theory in cognitive linguistics may help to answer the question.